

会議結果要旨

モ [主な意見]

ニ ・護岸直下のハビタットの復活の可能性や泥干潟への影響はどうか。

タ ・澁筋底部への評価を行うべきである。

リ ・泥干潟とか砂といったいろいろな段階の干潟があるが、それぞれ
ン 生息する生物が違い、それぞれが生態的には価値を有しており、フ
グ ジツボも重要な生物である。

調 ・国レベルのレッドデータブックに挙がっていなくとも、県内版で挙
査 がっているものは、可能な限りその種の生息を守っていく必要がある
に のではないか。

関 ・平成16、17年の調査中、冬季に一度だけ確認された「モクズガ
す ニ」がいるが、たまたま他からきた生物とすれば、これも昔から三番
る 瀬にいた生物とするのか、その取り扱いはどうするのか。

意 ・景観のモニタリングについては、台風によるゴミの堆積状況を見る
見 必要があるので、回数や時期を配慮されたい。

海生生物への影響予測と評価

1. 護岸改修によるハビタット(生物の生育・生息場)への影響

(1) 直接的な影響

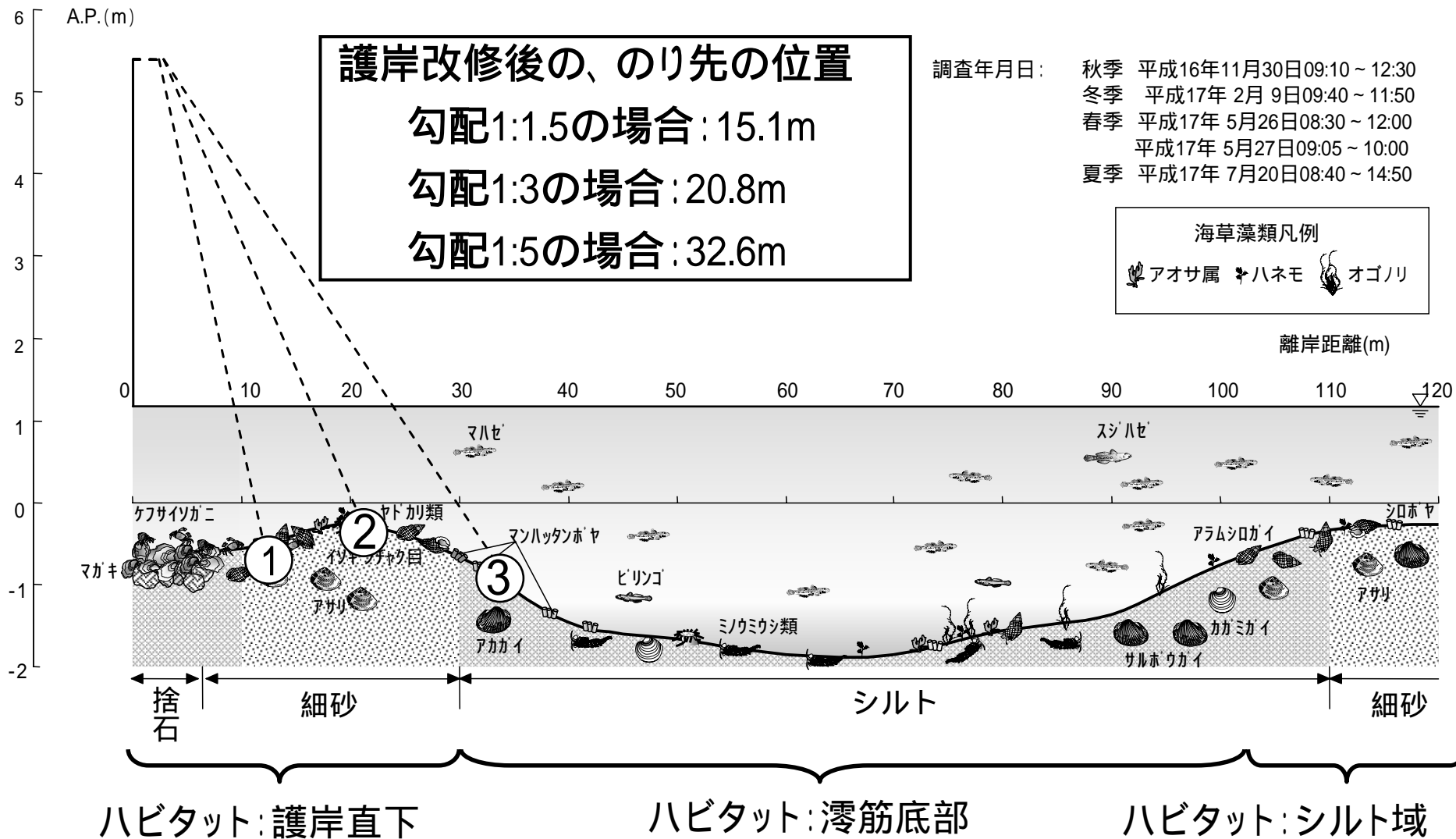
石積傾斜護岸に改修されることにより、現在の直立護岸直下の捨石マウンド上に成立している潮間帯生物のハビタットは喪失し、石積傾斜堤上の潮間帯に置き換わる。

(2) 間接的な影響

改修後の護岸形状が周辺域の地形、地質(底質)に影響を与えた場合、その場所に生育・生息する生物に影響が及ぶことが考えられる。

2. 施工区間に生育・生息する重要種への影響

直接的な影響を受ける範囲 = 護岸改修により改変される範囲 塩浜2丁目(測線L-3)のイメージ

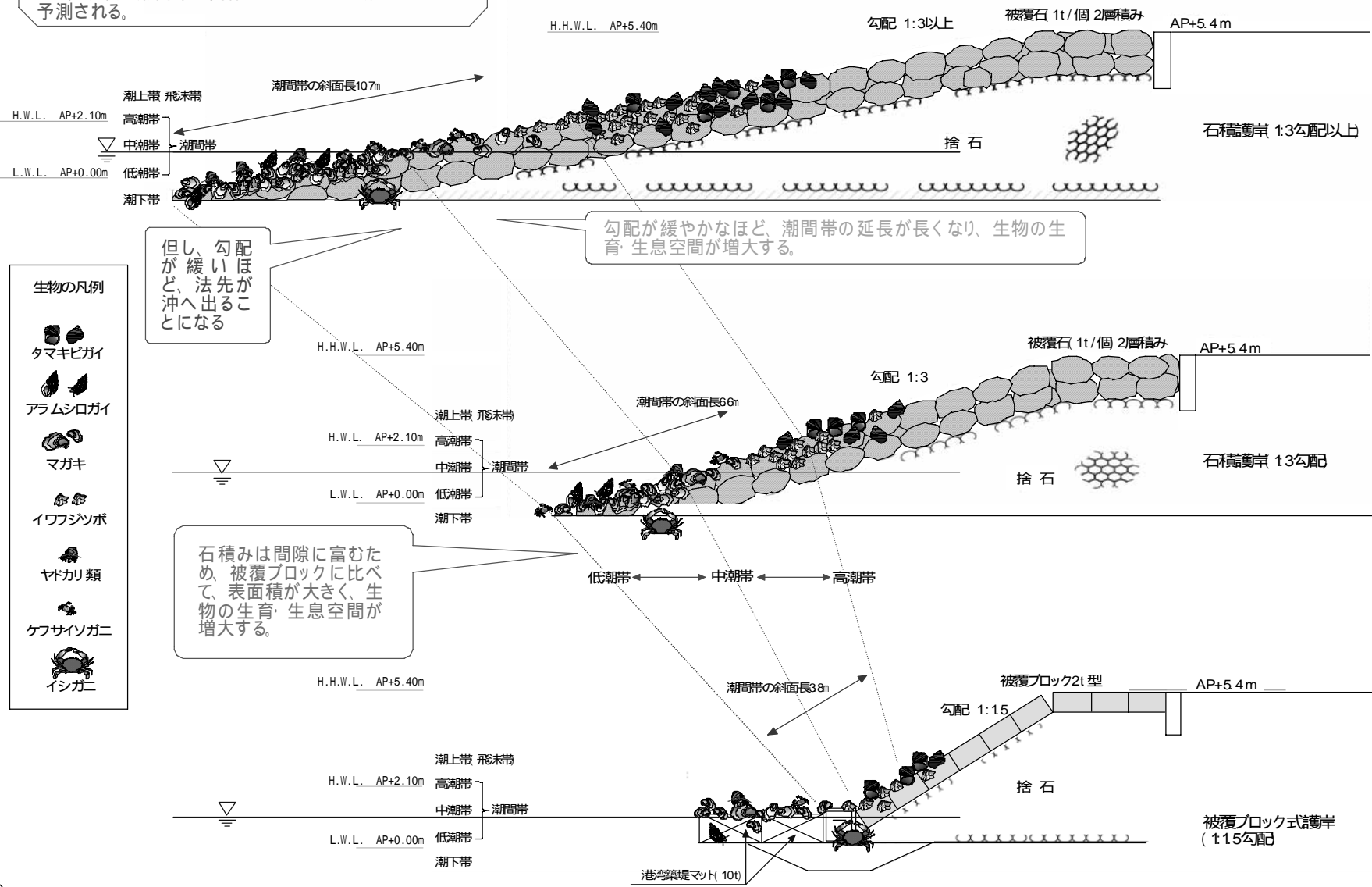


1: 図中の水位線は東京港の平均潮位を示している。
2: 生物の出現状況は秋、冬、春、夏季の4季を合わせたもの

勾配別の潮間帯ハビタットの復元イメージ

図-4 護岸改修後のハビタット復元イメージ

周辺部に同様な潮間帯のハビタットが分布すること、施工が段階的に進められることなどから、改修後の護岸には、現状の潮間帯と同様なハビタットが成立することが予測される。



類似事例による検証(千葉港海岸習志野地区の例)

施工後約1年半で、新たな護岸に潮間帯生物によるハビタットが成立

付着生物調査結果(千葉港海岸習志野地区)

調査年月日:平成17年3月27日10:40~11:30

観察位置 (種名+被度%)	植物 (種名+被度%)	動物 (種名+個体数)
A.P.2.0m (H.W.L)	-	アラレタマキビ(20)
アオノリ属10% アマノリ属+	アオノリ属80%	イワフジツボ(20)
		アラレタマキビ(18)
		マガキ(4)
		タテジマインギンチャク(4)
		コウロエンカワヒバリガイ+
		ムラサキイガイ(2)
		イワフジツボ+
		イボニシ(1)
		タマキビ(3)
A.P.1.0m (M.W.L)	アオノリ属60%	マガキ(4)
		ムラサキイガイ(3)
		イボニシ(1)
		タテジマインギンチャク(20)
		タテジマフジツボ+
		コウロエンカワヒバリガイ+
		カンザシゴカイ科+
アオノリ属50% セイヨウバルリ+	ムラサキイガイ+	タテジマインギンチャク(1)
		コウロエンカワヒバリガイ+
		マガキ(3)
		カンザシゴカイ科+
		インギンチャク目(3)
		タテジマフジツボ+
アオノリ属50%	コウロエンカワヒバリガイ+	マガキ+
		タテジマフジツボ+
		インギンチャク目
A.P.0.0m (L.W.L)	アオノリ属80%	コウロエンカワヒバリガイ+
	セイヨウバルリ+	ムラサキイガイ+
		マガキ+
アオノリ属60% セイヨウバルリ+	コウロエンカワヒバリガイ+	ムラサキイガイ+
		タテジマインギンチャク(19)
		レイシガイ(1)
		マガキ+
アオノリ属80%	ヒドロ虫+	カンザシゴカイ科+
	セイヨウバルリ+	

海藻藻類凡例
アオノリ属(緑藻類)

調査地全景

平成14年度竣工の石積護岸。護岸の勾配は1:3である。
概ね、H.W.L(高潮位)付近までは飛沫などで常に濡れていること、
M.W.L(中潮位)付近まではアオノリ属等の藻類が繁茂していることで、
高さ冠水頻度の違いにより生物の生息状況に違いがみられる。



天端 A.P.5.4m

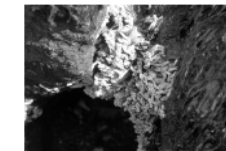
H.W.L. A.P.2.0m

M.W.L. A.P.1.0m

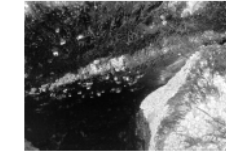
L.W.L. A.P.0.0m



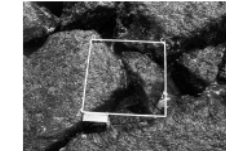
H.W.L.の上部(A.P.2.5m 付近) 写真中央はイワフジツボ。この付近は本種の他にアラレタマキビなど、乾燥に強い生物しか生息しない。



石積の隙間(日陰の部分)。M.W.L.付近 多毛類のカンザシゴカイ科が多数生息する。



石積の隙間(日陰の部分)。L.W.L.付近 タテジマインギンチャクやタテジマフジツボ等が多数生息する。



L.W.L.付近、日当たりの良い石の表面はアオノリ属(緑藻類)に被われる。

石積の隙間は、インギンチャク類や貝類を始め多く生物の生息空間として利用されている。

冠水頻度の高い場所では、日射の当たる岩の表面は主にアオノリ属(緑藻類)で覆われる。

また、岩の陰や隙間には、乾燥を嫌うカンザシゴカイ科やインギンチャク類などが密集して生息している。

注) この断面図は、作図の都合上、実際よりも横方向を縮めて(急傾斜)になっています。

